

られる。急に矛盾することを書くようで申し訳ないが、本書はコンパクトにまとまりすぎていない、ということが魅力でもあるのである。本書の読後感、映画『天平の甕』に似ている。この映画は遣唐使たちのエピソードをちりばめた、3時間近い大作である。見ている間は長さに辟易して「もっと編集して欲しい」と思うのだが、見終わったとき、遣唐使たちの生き様を観客が疑似体験するために必要な時間であったと思わざるを得ないのである。本書も、東南アジア諸地域の多様性を読者に疑似体験させようとするかのようにぶ厚く、重い。私としては、それに負けずに多くの人々が本書を手を取ることを願う。

韓敏編

『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』

東京、風響社、2009年
540頁、6,000円

奈倉 京子*

1 本書の特徴・独創性

本書は、国立民族学博物館共同研究「中国の社会変化と再構築——革命の実践と表象を中心に」(代表:韓敏、2003年10月-2006年3月)の成果として、日本人研究者と「日本留学組」中国人研究者によって執筆された全17編からなる論文集である。中国人研究者の執筆者の中には革命(文化大革命)を経験した者も含まれており、振り返ると沈痛な気持ちに陥る過去を正面から見つめ、当時の社会の仕組みを解明し、客観的に論じようとする勇気と使命感に感銘を覚えずにはいられない。本書は、序論を加えた三部から構成されている。

序論で編者の韓敏はまず本書の特徴・独創性について総括している。1つは、「革命」を単に歴史の出来事としてみるのではなく、革命の理念に基づいてできた諸制度、諸言説、芸術、新しい風習などを1つの(文化)システムとして取り上げる視座を提

示している(pp.2-3)。この視座を具体的に掘り下げるために、3つの問題設定を行った。第一に、社会主義革命がどのような言説や諸制度をいかに生み出しているのか、新しく生み出されたものがどのように表象され、実践されているか。第二に、革命的諸制度と言説における従来からの連続性と断絶性を探求すること。第三に、革命的言説、諸制度、実践と表象が市場原理のグローバル化の時代において、いかに展開され、再構築されているか、である(p.2)。

もう1つは、「実践」と「表象」の概念的枠組みを用いて、近代中国の「革命」のシステムを解明しようと試みている。ここでいう「革命」とは、1911年の辛亥革命を含む100年の近代中国の急激な社会変化一般を射程に入れている。つまり、革命を近代化の過程の中で取り上げる視点である(p.4)。本書のキーワードの「表象」とは、象徴、あるいは物事を象徴的に表したり代弁したりすることを意味する。そして「実践」とは、広義では、理念の反対語としての行為を意味する実践、狭義では、人間の社会関係に対する認識と働きかけを意味する(p.5)。

紙面に限界があるため、1篇ずつ紹介する形をとらず、部ごとに内容紹介を行い、先に挙げた3つの問題設定と対話しながら、各部の主題と部間の内在的つながりを読み解いていきたい。

2 内容

第一部「服装・映画・アートにみる革命の表象」には5編の論考が収められている。「音」として記憶される語り物とおしてみた中国の伝統芸能と音楽に与えた「革命」への影響(井口淳子論文)、現代アートからみる女性性の変化にみる毛沢東時代の影響(牧洋一論文)、文化大革命(以下文革と表記する)時期の軍服・軍便服に対する人々の意識(汪曉華論文)、中国ニューシネマの文革の描き方(西澤治彦論文)、「雷鋒」という人物の画像の描かれ方の変化(武田雅哉論文)から、社会主義革命によって生み出された言説や諸制度の諸相、および新しく生み出されたものがどのように表象され、実践されているか、また民衆へのメタファーがどのように変化したか、ということが論じられている。

このように第一部は、「革命」という政治色が強い歴史的出来事が、一般民衆の他愛もない身近な日

* 静岡県立大学

常生活の節々に浸透していることを体系的に実証している。民衆へ発せられた「革命」のメタファーは民衆の「無意識」と化していくが、学術的な視座から、身近な民衆文化に浸透するアイテムやメディアを通して革命の言説をとらえようとするのは、この「無意識」を解釈していく作業でもある。そして「無意識」を注入したのは、革命的意味を付与し、それを視覚的・聴覚的に民衆へ示す「装置」であり、執筆者たちが対象としている「表象」はこの「装置」とも言い換えることができる。

第二部「社会制度と文化儀礼の再構築」には6本の論考が収められている。広西の少数民族地区の政府による風俗習慣の改革（塚田誠之論文）、北京の葬儀と葬法、墓と祭祀の在り方の歴史からみる漢族の他界観と靈魂観（何彬論文）、葬儀改革とそれが公墓制度における仲介的存在を介して民衆に届けられる状況（田村和彦論文）、四川地域における転生するとされる靈魂の表象および儀礼的实践（謝荔論文）、宗教的専門職者のライフヒストリーの分析からみるムスリム少数民族の地域社会における歴史と社会変化（王建新論文）、個人の視点から考察した湖北省農村地域の家族・親族制度の実態と変化（秦兆雄論文）から、社会主義革命前後の社会変化の文脈における諸制度と言説における従来からの連続性と断絶性を探求している。

第二部の論考に共通している観点の1つは、政府が風俗習慣に関与し、その表象に変化がみられるものの、民衆の底流では依然として「伝統」が生き続け、人々の日常の信仰や秩序の中で機能しつづけているという連続性である。この連続性は民衆が政府と衝突しないようにうまく「適応」（戦略、選択、順応）してきたことによる。核の部分は譲らない、「和して同ぜず」的な順応性が看取できる。但し、若干気になった点を挙げておくと、少数民族居住地区を対象に、革命が社会にもたらした影響を扱っている点が興味深いものの、漢族の革命経験と同一平面上で扱っており、漢族地区の革命の経験や記憶との相違点あまり語られていないのが少々残念である。

第三部「グローバル時代における革命の記憶と構造転換」には、6本の論文が収められている。ノスタルジアを手掛かりとし、消費者側からみた革命聖地の観光化における革命表象の再創造（東美晴論

文）、毛沢東生誕祝典と民間祭祀からみる儀礼化された意味とそのダイナミズム（韓敏論文）、花児会（「花児」とは中国西北部地域に広く伝わる民謡）をめぐる政府と民間の拮抗と融合のプロセス（徐素娟論文）、「漢服運動」（近現代の中国社会における「漢服」復古を旨とした社会的文化実践）を通してみた「伝統」の学習と中国人の民族アイデンティティの関係（周星論文）、1960年代の日本における文革の影響および高度経済成長下に大都市の近郊で育った筆者が黄土高原に辿りつくプロセスの自伝的考察（深尾葉子論文）、今日の中国の市場経済活動における風水実践の果たす役割（渡邊欣雄論文）から、市場原理のグローバル化の時代において、革命的言説、諸制度、実践と表象が、いかに展開され、再構築されているかについて論じられている。

この第三部のいくつかの論考は、問題提起にもある「革命的諸制度と言説における従来からの連続性と断絶性を探求すること」に回答を提示している。それは時代の「不連続性」と、その中で求められる記憶、アイデンティティ等の「連続性」とのパラドクシカルな関係である。例えば、東論文は、40歳代が最も革命表象にノスタルジアを見出す理由は、社会・経済生活に大きな影響を及ぼす政治変動や経済体制の変換を経験してきたため、時代の不安定さ（＝非連続性）が、世代の記憶となるノスタルジアを強くした（＝連続性を求める心理）と読むことができる。加えて、韓論文では、「社会の危機的状況や転換期に象徴が際立って出現する」というヴィクター・W・ターナーの見解を引用しながら、改革開放とそれ以前の時代との「不連続性」の中に、現政権やナショナルな記憶の「連続性」を求める関係を論じている、と読み取れる。この「不連続性」と「連続性」が同時に起こるといふアンビバレントな関係の中に「伝統の学習」や「文化自覚」（周論文）という実践も内包されている。

以上のように本書は、トップダウンの国家言説・政策と民衆の実践という複眼的視点から、近代革命の中で、社会主義理念がいかにイデオロギー化され、制度化され、表象され、個人、家族、集団がいかにそれらを内在化し、急激な政治・社会変化に適応しながら、戦略的に親族組織、冠婚葬祭、民間芸能、民間信仰および地域社会を再編成してきたかを取り上げ、明らかにしている（p.3）。そして、ブ

ラティカルな民衆の性格や深層の「信仰」（ある特定の宗教を信じているということのみならず、人々が日常生活の中で拠り所としている行動規範や価値観）の部分は、社会変化に関係なく不変的であったことを明らかにしている。

3 本書の意義

中国の近代革命と社会変化について人類学的視座から研究した先駆的な研究者に、佐々木衛がいる。佐々木は、1986年から1990年の調査を基礎に、村の政治と行政、家族と親族、宗教と娯楽の集団構造、武術集団の活動の考察から、中国社会の近代化（近代革命）の過程の中で、伝統的な基層構造が人々のエネルギーをくみ出し、方向を与えている論理を解明しようとした[佐々木 1993]。佐々木の研究と本書の類似点は、前者が「対立と連帯」、「分節化と統合」という、相反するベクトルを同時に内在させているというアンビバレントな構造を提示しているのに対し、本書も時代の「不連続性」と人々の意識構造の深層部にある不変的な論理の「連続性」を同時に内在させているアンビバレントを提示していることである。本書のいう「革命」の概念は、佐々木のいう「近代化」のそれと通底する部分がある。しかし、佐々木が「伝統的な構造の組み換え、変形、そして新しい伝統の形成」[佐々木 1993: 4]という視点を重視し、基層を流れる論理（＝伝統）の解明に取り組んだのに対し、本書は、「伝統」を相対化し、近代革命を経て生成した「もうひとつの伝統」、「もうひとつの近代化」を「文化」の総体と捉えている。この点が斬新的である。また、佐々木が1930年代から解放までを対象としているのに対し、本書はグローバル化の影響も視野に入れ、現在進行形で存在する表象や実践も対象とし、そこから「革命」のメタファーを解明しようとする新たな領域での議論も展開している。

このように本書の意義の1つは、「文化とは何か」という文化人類学の永遠の命題を、「革命」から追及し、「革命の文化システム（体系）」を浮かび上がらせたことである。ここでいう「文化」は、行動様式や生活様式といった人の営みの総体という包括的な意味に加え、適応（選択、戦略、順応）のシステムも包含している。評者は当初、本書を読み進めるにつれて「革命」の概念が曖昧に感じるこ

た。編者が冒頭で定義付けしているものの、辛亥革命、文革、そして新中国成立以降の毛沢東を指導者とする一連の政治動乱をすべて「革命」に内包させ、更に改革開放がもたらした社会や文化の変化も「時代の不連続性」を招いた革命的要因と見做している節もあり、すべてを同一の「革命の文化システム」に含めてよいものかと違和感を覚えた。なぜなら、第一部は「文革」という同様の政治動乱の作用のもとで生成された「文化」を扱っているが、第二部と第三部では、1930年代から50年代までの政府の政策を含む社会背景全般のもとで風俗改良政策を捉えた塚田論文や、文革を機に政府が関与することにより変化した文化を扱っている徐論文、そして革命の表象としての服装文化というよりも、革命以外の様々な要因の影響を受けて地域とエスニック文化が再創造されているという見方が強い周論文などもみられ、革命以外の中国社会の要因、或いは中国社会を超えたグローバル化経済がもたらす要因もまた重要ではないかと思われたからである。この違和感は、ともすると、人類学と文学、芸術などの対話の問題からくるものかもしれない。しかし、見方を換えれば、これこそが革命を「歴史的出来事ではなく近代化の過程の中で取り上げる」ことの結果としてみてきた「革命の文化システム」であり、タイラーの提唱したような「人々の営みの総体」としての「文化」と解釈することができるのである。

また本書のもう1つの意義は、「政治的フィールド」において生成、醸成、浸透していった「政治文化」の諸相を描き出したということである。古典的な政治人類学では、際立った政治権力や支配機構をもたない社会を扱い、一見非政治的な諸々の出来事の中に政治過程を見出してきた。加えて、儀礼、親族関係、妖術といった人類学の伝統的研究対象も政治人類学の対象とされてきたし[石井 1994: 409-410]、成文化された法や組織整備の進んだ政体があるとは限らない地域社会を対象とし、「社会秩序」の有無探求から始まり、政治的制度と機関の体系が、他の近親親族、信仰などの諸体系とどのように連携しあうかを検討してきた[大森編 1987: 1-3]。これに対し、本書は、古典的な政治人類学の切り口に着目しながら、制度化された政治体制や特定の政治事件をめぐる、それらに関わってきた人々の生き様を、親族組織、冠婚葬祭、民間芸能、

民間信仰といった「文化」から透視しようとしている。

更に、ローカルな一般庶民の民間の非公式的な社会秩序の論理を描き出しているだけでなく、グローバル化の波が押し寄せ、近代化が進行し続ける現代中国の社会的・政治的・経済的背景とその影響力も考慮しながら、時代を越え、地域を越えた「政治文化」の誕生や変遷にも言及している。編者の韓敏はかつて中国安徽省北部のある宗族村落で調査を行い、中国革命下での農民・農村、宗族、婚姻などの変化について政治人類学的手法を用いながら民族誌を完成させた【韓敏 2007】。このモノグラフでは、革命、そして改革開放下での宗族の移動や村落へのキリスト教の伝播、儀式の復興といった村落の変動や動態性を徹底的に描いている。本書はこのモノグラフの構想に基づきながら、中国の多様な地域の文化現象を巨視的に分析することで浮かび上がった「政治文化」を提示した民族誌として読むこともできる。

最後に、本書の教育的な意義に触れておきたい。評者は本務校で国際関係学部の学部生を対象に「中国社会論」の講義を担当しているが、学生のコメンタリーを讀むと、中国の一般民衆にしみ込んでいる「信仰」の源泉について辛抱強く理解する試みをせず、現在進行形で起こっている出来事やメディアの見解との対話へ飛躍してしまう傾向が顕著であることを時々残念に思う。橋本満が「社会主義体制に対する批判は、社会論あるいは文化論として中国社会そのものを正面から論じたものにはなりえなかった。中国の実態を批判しても、対象は、社会主義が最大の要因となった【実態】であって、中国そのものの文化や思想から生じた【実態】ではなかった」【橋本 1990：456】と指摘しているが、「中国そのものの文化や思想から生じた【実態】」は、社会主義革命を経験して変容を繰り返しても、民衆の巧みな「適応」により、「旋律」を維持してきたことを本書も我々に伝えている。歪んだ中国イメージの再生産を防ぐという意味においても、中国に関心のある多くの学生にも読むことを勧め、草の根の視点から中国社会・文化の「実態」について考えてほしい一冊である。

参照文献

石井 真夫

1994 「政治人類学」【(縮刷版)文化人類学事典】石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正雄・佐々木高明・祖父江孝男(編)、pp.409-410、弘文堂。

大森 元吉(編)

1987 「法と政治の人類学」朝倉書店。

韓 敏

2007 「回廊革命と改革——皖北李村的社会変遷与延續」(陸益龍・徐新玉訳)南京：江蘇人民出版社。

佐々木 衛

1993 「中国民衆の社会と秩序」東方書店。

橋本 満

1990 「中国社会を見る目」【現代中国の底流——痛みの中の近代化】橋本満・深尾葉子(編)、pp.453-486、行路社。

池田光穂著

『看護人類学入門』

東京、文化書房博文社、2010年
259頁、2,400円(+税)

大谷 かがり*

はじめに

私は看護師である。正直に申し上げて、日本文化人類学会の中で自分が看護師であることに気後れするし肩身が狭い、そう勝手に思っていたので、この本を目にした時ここで看護のことについて触れてもよいのだと、目からうろこが落ちる思いだった。

今まで医療人類学に関する書籍は存在したが、日本人が出版した本の中で看護人類学という名称のものは本書が初めてであろう。私の知る限り、看護師は20年以上ものあいだ人類学に興味を持ち続けている。たとえば1990年4月発行の『看護研究』では、「焦点 文化人類学的研究方法」という特集が組まれている。しかし人類学は看護学に興味を持ってこ

* 中部大学